1992年を迎えて

日本オペレーションズ・リサーチ学会副会長
東京理科大学　**牧野　都治**

ＯＲ学会の皆様，謹んで新年のおよろこびを申しあげます．1991年は激動の１年でしたが，本年はどうぞおだやかな年でありますようお祈り申しております．さて，年頭のご挨拶に代えて，ＯＲによせている私の思いを，率直に申し述べてみたいと思います．

・国際化とＯＲ

最近私は，ＯＲ学会にかかわりのある各種の会合に積極的に出させていただくよう心がけております．たとえば(毎回ではありませんが)，待ち行列研究部会，丸の内ＯＲクラブ，ＯＲ学会総会，昨の研究発表会（戸畑市民会館）と秋の研究発表会（関西大学），ＳＳＯＲ（日大軽井沢研修所），そして第７回経営工学研連シンポジウム（日本学術会議）など．また，岡会長の代理として，日本工学会総会，日本品質管理学会設立20周年記念式典などにも出席させていただきました．これらの会合のうち，私がいちばん気をつかったのは研連シンポジウムでした．第７回シンポジウムはＯＲ学会が幹事役にあたっていました．それで，従来のしきたりにより，副会長の私に実行委員長の大役がまわってきたわけです．ＯＲ学会の関口事務局長も大変ご苦労されたようですが，経工関連の４学会，すなわち日本経営工学会，日本オペレーションズ・リサーチ学会，日本品質管理学会，日本開発工学会から選出された実行委員の先生方のお力添えと，ＯＲ学会前副会長小田部齊氏のご助言により，早々とプランはできあがりました．しかし，当日いかほどのご参加が得られるかが懸念されていました．ＯＲ学会からのご参加が少ないようですと，幹事学会としての鼎の軽重を問われかねない雲行きでしたので，小田部さんをはじめとして，ＯＲ学会の実行委員の先生方と一緒になって，会員の皆様のご参加を強く要請したわけでした．幸い，岡会長の絶大なお骨折りと，理事の方々の積極的なご支援もあり，どうやら幹事学会としての面目を保つことができたのではないかと安堵しております．ご参加くださいました皆様に，紙面をかりてあつくお礼申しあげます．なお，そのシンポジウムの模様につきましては，ＯＲ誌(1991年10月号)で山上伸氏が適確にご紹介くださっていますので，詳細は割愛させていただきますが，そこでの統一テーマは「国際化と経営工学」．また，日本工学会総会でのパネル討論会のテーマは「科学技術の国際化と学協会」．それに何よりも，ＯＲ学会秋季研究発表会の特別テーマは「経営の国際化」．まことに時宜にかなった特別テーマでした．藤田彰久先生，川上哲郎氏，松田武彦先生という権威ある先生方から，このテーマをめぐって，蘊蓄を傾けられたご講演を拝聴することができて幸いでした．また，発表会の中で若山邦紘先生から，北京で催されたＡＰＯＲＳ（アジア太平洋地域ＯＲ学会連合）国際会議のご報告を伺いました．次回は日本で，ということのようでした．その意味からも，ＯＲ学会に外国人会員が多数入会されるよう期待したいし，また入会されやすい制度をお作り願うのはいかがかとも考えます．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

・3つのC

岡会長は，研連シンポジウムの特別講演予稿集の中で，これからのORに必要な3つのCについて述べておられます．これは，OR誌昨年1月号の年頭のご挨拶の中にも記されていますが，その1つは，進歩のために競争(competition)を行なうこと．2つめは，共存のために協調(cooperation)を進めること．そして3つめに，人類社会への貢献(contribution)が大切であると強調しておられます．たいへん結構なお考えであると，私も敬服しております．ただし，狭くORに関していうのであれば，ORは本来，共存的競争のための科学であって，競争的共存の科学ではないのではないかと考えます．それで，competitionのCは大文字のC，あとの2つは小文字のCと考えたらよいと思います．ただ，その競争の意味が従来の1企業ないしは小集団単位のそれから，場合によっては国単位，またひいては地球規模のものにまで拡がってきたといえるのかもしれません．

・もう1つのC

もう10年以上も前になると思いますが，OR誌で“これからのOR”と題して，斯界の方々にアンケートをお願いし，記事にされたことがあります．私も末席で，次のような私見を述べさせていただきました．それは，「品質管理が従来のSQC（統計的品質管理）からTQC（総合的品質管理）へ発展したのと同じように，ORはSORからTORへ」と，飛躍を期待したものでした．ただし，ここでいうSORとはサブシステムの最適化を考えるOR，TORはトータルシステムの最適化をめざすORという意味あいのものです．10年経ったいま，ORは手法面ではある程度，SORからTORへと脱皮してきていると思います．しかし実用面からは未だしの感を否めないのではないでしょうか．ORには，何にもまして，理論・応用両面における創造(Creation)が大切です．このCこそ，特大の大文字のCであろうかと考えます．ORは経営に生かすべき知恵の科学であるともいわれます．今年こそ，創意あふれるORが続々と誕生し，発表されることを期待しています．そして，それらをふまえて，日本的ORが海外に輸出され，国際社会において大きく貢献できるようになることを願っております．

・新年の夢

OR学会では，さきに「第2次長期計画」を策定しました．これはたいへんキッチリした内容のもので，さすがにORのプロがお作りになった長期計画であると感服しています．これがどのように遂行されているか，またどのように修正されたらよいか等について，斉藤副会長主宰の委員会が設けられ，検討がなされています．これらの計画を適切に実行していただくことによって，わが国のOR活動が高められ，3つのCと1つのCを具現することにもなるであろうと考えます．そのためにも，何といっても（さきほどの外国人会員の増強もふくめて），会員増強が1つの重点目標になろうかと考えます．OR学会は窓口が広いので，その気になればどなたでもORの1つの分野でのエキスパートになれます．そういう点で，お入りいただきやすい学会であると思います．私も周囲の学生諸君に，ぜひ入会するようすすめています．しかし，大きな障害があります．学生は，「入会すればどんなメリットがありますか」ときくのです．単に年会費が安いというだけではダメなようです．若い人たちに魅力ある学会運営を考えるべきでしょう．たとえばSSOR（若手によるORサマーセミナー）をみてみましょう．いつ覗いてみても，たいへん盛り上がっています．こういう勢いを，学会内にどんどん持ち込んでもらいたいと思います．OR学会の会員数は現在約3,000ですが，それが一躍4,000名に．これが私の初夢です．今年はOR学会創立35周年にあたります．この年に，どうぞ皆さん，4,000名達成へのキャンペーンを展開しようではありませんか．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．